

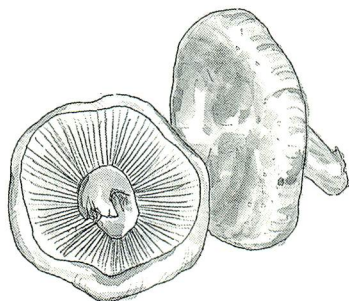
みめじみの

第23部



みめじみの

第23部



大谷光道著

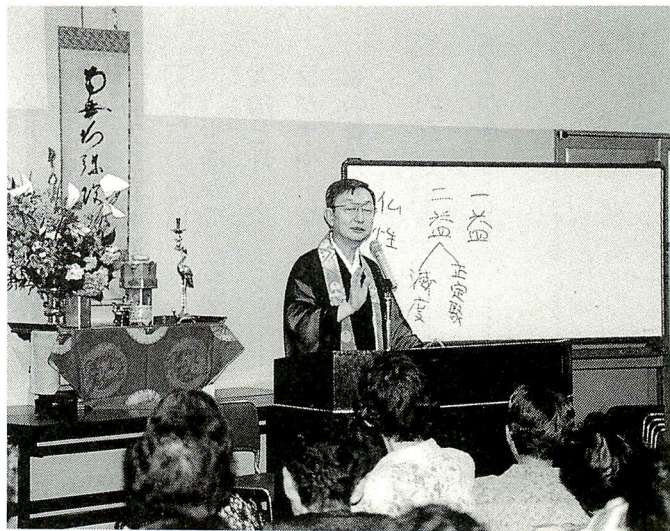
目次

ご利益は何階建て?	2
地獄、極楽は	
前時代のものか?	3
一益か二益か	5
やはり二益	9
一番大切なもの?	12
「のに」のない	
生活ができるか?	14
太陽と月	18
ラジオやテレビ	21
家の骨組みと同じ	23
読者の頁	28
あとがき	31

ご利益は何階建て？

この前お会いしてから半年ぐらいになりますね。皆さんお元気のようで、何よりのことです。昨日は庄川荘でしたか、家内ともども泊めていただいていたゆっくりすることができ、ありがとうございます。そこに

露天風呂があり、岩で囲まれた湯船の周りに木が植えてあって、そこがなんかクリスマスツリーみたいでポコポコと……。何かなあと思ったたら、ホテルでした。それがね、一匹二匹じゃなくて、数えてたらだんだんだん数が増えてき



て十匹、いやもつと……。

気持ちいい風が吹くし、まさにこういうのが極楽かなあと思いました（大笑）。私、まだ行ったことないんですけどもね（大笑）。お経に書いてあるのによると、何の操作もしないのにお湯の温度が思った通りにすつと変わるんだそうです。まあ、昨日のお湯はちよつとそれにしては熱かったですけれど（笑）。だからここはやっぱりの世なんかなあと思いましたが（笑）。そんなふうに、ゆつくりさせていただきました。

地獄、極楽は前時代のものか？

極楽については前に他所で出た質問の中に、「現代ではもう、地獄とか極楽というのをおかしいんじゃないか。」と仰る方がありました。

いつからを現代というのか知りませんが、現代になったからって地獄や極楽がなくなったりするものではないのですが……。まあ、どちらかというと、

そういう方々は結構世の中にはおられるのかなということを、時々思います。「非科学的だから信じられない。」と言う方がおられますが、それと根っこが同じなんでしょう。科学というのは前にもお話ししましたが、決して万能じゃなくて、人間が生活を便利にするために科学というものを利用してきているんですね。というより、科学は初めから客観世界という限定を決めて発達してきたもので、宗教とは扱う世界がまるつきり違うんだということが時々忘れられることが、混乱の原因になっているのだと思います。

われわれが極楽・お浄土へ行くというのは科学で扱う客観的な世界のことではなくて、主観的な世界で考えていかなければならない問題です。主観的というのは客観的に対して言うことですが、例えば「みんなで一緒に極楽へ行こう。」とか、「みんなで極楽を見に行こう。」とか、そういうことはできないでしょ。やはりお浄土は一人で行くところです。ですから科学の通用しない、科学の力でどうしようということを考えることが最初からおか

しいので、そういう世界へ行くのは自分ひとりで行くわけですね。

つまり、科学のように一つの事柄を皆で一緒に観察したり、経験したり、またそれを分析したりはできません。また、科学の扱うものだと、同じ一つの事柄を別の場所、別の時間に、別の人がやっても、同じ結果が出て当たり前ですが——例えば、ニュートンのりんごの話のように、どこで誰が物を落としても同じ落ち方をするように——、お浄土行きの旅行はこんなわけにはいかないから、なかなか安心できないんですね。

そんなわけで、科学と宗教をごっちゃにしているというか、宗教の中に科学を持ち込んで悩んでいる方がおられるのですが、その話は今日はこれくらいにしておきましょう。

一益か二益か

ところで、動機はこれとは違うのですが、浄土真宗の流れを汲む人の中に

も、地獄や極樂のことを軽視したり、さらに無視したりする人が現れることがあるので、そのお話に移ります。

それは一言で言くと、「今、覚りたい。今、この生きているこの身において、この世界の中で覚りを開きたい。仏様になりたい。」という動機です。そりゃー、「来世での成仏など、そんな先、どうなるかわからないし、それまで待っているのも辛気くさい。」というのが人情だというのは、わからないではないですがね。

これはまあ、昨日・今日のことじゃなくて、大昔から浄土真宗の教えをいただいている人の中にそういう考え方を膨らませて一つの教説にする人がいたわけですね。「そういう人は浄土真宗の教団をかき回して人を動揺させたりせずに、初めから聖道門へ行けばいいじゃないか。天台でも真言でもあるいは禅宗でも、この世で覚りを開くように修行もし戒律も守っておやりなつたらいいじゃないか。」と思うんですが、浄土真宗に身を置きながらそうい

ご利益は何階建て？



う勝手なことを言い出す人がやはり歴史の中にはときどき現れたんです。

皆さん、今まで聞かれたお説教の中に時々出てきていますと思いますが、

「一益いちやく」とか「二益にやく」とかいうことをお聞きになったことありますね。「聞いたことない。」と仰る方、おられますか。手が上がらないのは、全部聞いておられるんですね（笑）。あつ、貴方は、聞いておられない。お一人、正直に言ってくださいました。他の方は、嘘をついて手を上げないというんじゃないくて、「聞いたかな。そういえば、聞いたような気もするな。」ということなんでしよう（笑）。

真宗で私たちがいただくご利益は一体いくつあるんかと。「一つなのか、二つなのか。」ということが、浄土真宗の長い歴史の中で時々わからなくなつて惑う人、わかつていて他人を惑わせる人が出てきました。何のために人を惑わせるのかというと、一言で言つてやはり「自己顕示欲」の現れでしょう。

親鸞聖人のころから、第三世覚如上人のころも、また第八世蓮如上人のころにもこういう人が現れて、その間違いを正すのにたいそうご苦労になりました。そしてまた現代でも同じようにこういう事がしばしば問題になります。

やはり二益

浄土真宗は二益法門（二益の教え）です。「二益」というのは、教えの上でご利益が二段階の構造になっているという意味です。まずこの点を整理しておきましょう。

第一段階目のご利益は、生きているとき、今現在、平生のときに「信心」がわがものになることです。その信心の内容とは、将来この世の命を終えたら必ず——間違いなく——お浄土（極楽）に往生して（行って生まれて）、そこで直ちに覺りを開く、成仏する、つまり仏教徒としての本来の目的を達成する、それが間違いのないという確信です。このような状態を「正定聚」しやうじやうじゆうじゆう

と言つて、二度と後戻りをしない、心の落ち着いた状態になります。そして、この信心は阿弥陀様の本願力によつて差し向けられたものなので、「南無阿弥陀仏、〴」と報謝のお念仏を称える生活を送るようになるのです《現益げんやく（現世での利益）、正定聚の益》。

つぎに第二段階目のご利益は、実際にこの世の命を終わつたとき、お浄土へ行つてそこで覚りを開く、つまり仏様になることです。言い換えれば、第一段階目でいただいた信心の内容がそのまま実現することです《当益とうやく（来世での利益、「当」は「きつと」に違いない）、滅度めつどの益》。

そこで、問題の「一益法門」というのは、「今覺りたい、今成仏したい、お浄土に行くときまで待つていられない。」というような内心の密かな動機から、いきなり第二段階目の状態に到達しようとするものです。

聖道門の各宗旨では、いろいろな方法（修行）で現生（生きている間）の成仏を目指すのですが、浄土門はその修行の及ばない凡夫のための教えです。

凡夫が阿弥陀様の本願力のお蔭を被って、やがてお浄土に往生して成仏するのです。浄土真宗に身を置きながら、つまり何の修行もせずについて、「現生で覚える」という自分に都合のいい部分だけを聖道門から持ってきて、「今成仏するのだ、成仏できるのだ」というのはあまりにも虫のいい話です。聖道門の方々は種々の厳しい修行を重ねておられるわけですが、それでも容易に覚りを開けるものではないと聞きます。それどころか、修行の傍ら念仏をして来世の往生を願うとか、さらには浄土門に転向する方が出るくらいです。

一益法門と言われる「教え」はさらに分類するといくつかの種類がありますが、一言で言うと、本来の浄土真宗での第二段階目の中身——お浄土に行くこと、そこで仏になること——をこちらの、今いる世界、この世に引っ張ってくるものです。「浄土というの遠いところ、見知らぬところにあるのではないのだ。私の外にあるのではなく、私の中にあるのだ。私のこの心の中にあるので、それをおいて他にあるわけではない。だから阿弥陀様も私の心

の中においてになるのだ。」という具合で、さらには「我こそ仏だ。」になったりします。これは第一番目のご利益（正定聚）の履き違えで、お浄土行きが決まって煩惱に紛れながら念仏して阿弥陀様の光明の中に生活していくという、浄土真宗ならではの味わいを軽んじて、これを寛りだ、成仏だとしてしまっていることです。

一番大切なもの？

少し話が変わりますが、ここでお釈迦様の前世のこととして伝えられるお話（ほんしやうたん本生譚）の一つをいたしましょう。

お釈迦さまは前世において、ある国の王子（さつた薩埵太子）でした。

餌が取れず餓死しかけた七匹の子虎と母虎を見かけ、それを哀れんでわが身を投げ出して自らの肉を食わせて、彼らの命を救おうとしました。

まず虎の前で横になったのだけれど、虎は何もできないでいました。そこで、高いところから地面に身を投げたのですが、それでも虎はまだよう食べなかったのです。そこで、刀を探したのですがうまく見つからないので、乾いた竹で首を刺して血を出して虎に近づいたのです。こうしてやっと虎を救うことができました。（『金光明最勝王経捨身品』捨身飼虎^{しゃしんしこ}）

「自分の持っているものを惜しみなく人に与える」のが、「布施」の本来の意味です。お坊さんに出すお礼の「お布施」はこのことから意味が転じたものですが、やはり「惜しみなく出していただく」のが本来ですね（笑）。

話を元に戻して、自分の持っているものの中で一番大切で、しかも一つしかないものは命、生命です。それを惜しみなく与えるという最高の布施のあり方が示されたお話です。しかも、食べにくかったら食べやすくしてあげるまでの心遣いが、このお経に描写されています。

「のに」のない生活ができるか？

本来、大乘仏教では——したがって私たち浄土真宗も含まれるのですが——「六波羅蜜」の修行をしなければなりません。六波羅蜜（梵語「パーラミター paramita」の音写）というのは菩薩に課せられた修行で、つぎの六つを言います。

布施（施しをすること）、持戒（戒律を守ること）、忍辱（侮辱や苦しみに耐えること）、精進（修行に励むこと）、ぜんじょう禅定（精神を統一すること）、智慧（正しく認識し判断すること）です。

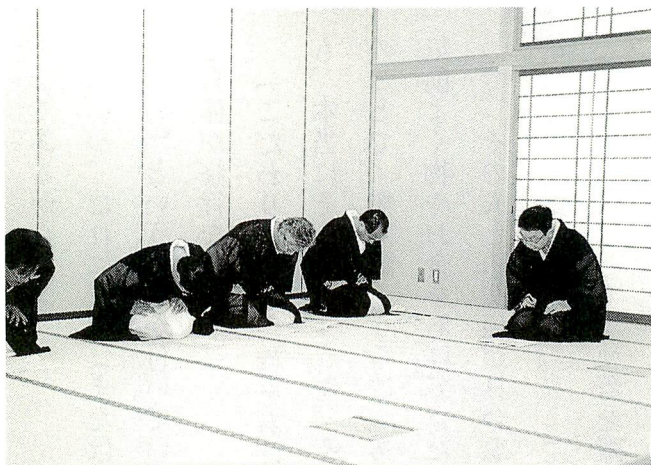
ここで、今お話しした第一番目の布施の行について見てみることにします。布施には、財施（金品を与えること）、法施（教えを説くこと）、むいせ無畏施（怖れない心を与えること）の三種があります。さらにこの中の財施について考えてみると、それは「人に金品を与えること」とだけ言えば、もちろん日常

的にやっているので特にどうということはありせん。しかし、それが布施の行であるからには、

「いつ、だれに、何（またはいくらのお金）をあげたのか、に全くこだわらない」という条件が付いています。つまり物に対するこだわりを離れることと自体が修行なのです。

「こだわりなく人に物をあげているのだ。」と仰る方もあるでしょう。でも、本当にそうでしょうか。それは、ある特定の人と仲よくやっているときのこと、無意識のうち「あの人はいつもよくしてくれるから」と思っている、気前よく物やお金をあげていたということではありませんか。何かのいきさつで、その人との関係が具合悪くなると「あいつはこの間、一万円もやったのに……。」と、「のに」が付くことになるはずですよ。

これで一瞬にして「執着を離れる修行」が台無しになってしまいます。さつきのお釈迦様と虎の話にはとても及ばないにしても、人にわずかなものを



坂東曲(大谷声明研修会)

あげるだけでも「布施」と言えるような
行いはなかなかできるものではありません。
この布施を含めて六つの修行が完成
してはじめて「覚った」「成仏した」と
言えるのであって、この六つの中の一つ
すら満足にできないくせに「覚った」
「成仏した」と言い出すのが、一益法門
の教えなのです。

言うまでもないことですが、このよう
に「実際に何ができるか」ということが
大切で、まさに「言うは易く、行うは難
し」です。どんな宗教でも同じことが言
えると思いますが、「どれだけのことが

身に付いたのか」が肝心で、もつと平たく言えば「できてなんぼ」ということを忘れてはいけません。高邁こうまいな理論や頭の中だけの観念がどれほど立派でも、「自分は偉いのだ」と自分自身に言い聞かせたり、他人に偉い自分を見せたつもりになったりしているだけで、自分自身に備わったものがなければ、それは利益でも何でもない、ただの妄想にしかすぎません。

頭の中だけで「覚りだ、極楽だ。」と考えていると、とんでもない間違いを犯してしまうことがわかります。浄土真宗には自分で励む、これといった修行がないので、現実の自分の姿を忘れてつい頭の中だけの「教え」に走ってしまふ嫌いがあると云えます。

親鸞聖人は「ご自身の本当の姿を見ること」に徹底したお方でした。「煩惱を立派たてに具え、自分自身の力ではそれをどうすることもできない凡夫である自分を見いだすことが、浄土真宗の大きな要である。」と、繰り返し説かれました。そのような凡夫の私であるからこそ、阿弥陀様の光明がありました

いのです。

『歎異鈔』の中に親鸞聖人のお言葉として、聖人がご自身のことを「いづれの行も及び難き身」と仰っています。「いづれの行も及び難き身」というのは自分自身の努力や自分で持っていると思う能力のすべてを尽くしても成仏・覚りは望むべくもない私であるという思いのことです。つまり、成仏の種（ぶつしやう仏性）など持っているとは思えないということです。

太陽と月

ところが、種もなしに生える植物があり得ないように、仏種のない者が仏になるというのは道理に合いません。親鸞聖人のご和讃に、

信心よろこぶそのひとを

如来とひとしときたまふ

大信心は仏性なり

仏性すなはち如来なり

(註…大信心⇨自分の力で起こした信心ではなく阿弥陀様からいただいた正しい信心、他力の信心)

とあるように、「他力の信心」が、私たちの成仏の種になるのです。つまり、信心が私たちの仏性なのです。信心をいただく(我がものにする)前には仏になる縁がなかった私が、信心をいただくことによって仏性が具わるということになります。仏性ははじめから自分の中にあるのではなく、阿弥陀様からいただいはじめて私のものになるのです。

いただいた仏性は、この世界に生きている今、ただのだけれども、やがてお浄土に迎えられるところで花開くという予約切符であって、その花は今開くものではありません。

そこで、今はどんな状態かということ、一つのたとえでお話ししましょう。

太陽の光が月にあたりますね——地球にあたることを考えてもいいんです

が、地球は私たちがあるの上にいるから見る事ができないので、月の話をします——そして月は黄色く光っています。しかし月の光は太陽があるから光っているんですね。鏡みたい反射して光っています。浄土真宗の信心——つまり、今話してきた仏性——はちょうどこの月みたいなものであって、自分で光を出すことはできないけれども、太陽の光に依って「ここにいますよ。」と、「光をいただいております。」ということにはできません。私たちが具えるようになる仏性はそういう意味での仏性で、単独で、独り立ちして存在する、本来の意味での仏性とは区別して考えなければなりません。

仏性については二つの意味があるので、もう少し説明しておきます。

一つは、今言った「本来の意味での仏性」で、仏そのもの、如来、その存在の全てが仏である、というものです。「本性を現す」と言うと悪い意味で使うことが多いのですが、まさにこれに当たります。

もう一つは、「仏となれる可能性」という意味の仏性です。内にその可能性を秘めているということ、け「あの人は〇〇の気がある」と言うときの気に当たります。これが、太陽と月のたとえでお話した月に当たる、私たちが具えるようになる仏性です。

ラジオやテレビ

もう一つ別のたとえをお話ししましょう。このごろはラジオはあまり聞くことにはないんですが、私たちは毎日のようにテレビを見ます。テレビはスイッチを入れておいても放送がなければ映らないし見られません。画面が胡麻塩みたいになってぎーぎー言うだけです。そうでしょ。放送があると必ず見られます。放送が電波に乗って来て、それによって映るテレビを見ることができのです。放送局が太陽、テレビは月です。

だから信心というのは、阿弥陀様のご本願をいただける身にさせていた

くことですから、つまり阿弥陀放送ですな、それを私たちは見聞きすることができません。ただ、見たり聞いたりすることはできるけれども、自分で放送はできません。それは阿弥陀様によっかかってお念仏をしているからです。自分自身が覺りを開いて阿弥陀様のような如来様になるのであれば、それは自ら光を出すことになるわけですが、私たちの場合はこの世の命を終わって浄土へ行けば仏様になるといふことで、今は光を反射するだけです。ですからお念仏を称えておられる方を見たりその方に触れることによって、新しくお念仏を称える人が増えるのだけど、その人は月であって太陽ではない、お日さまではないということですね。念仏の信者は月で、阿弥陀様が太陽です。ここのところをよくわきまえておく必要があります。

一益に陥った人は、阿弥陀様からいただいた仏性を、はじめから自分が持っていたものと錯覚するのです。その錯覚が「今成仏できる。浄土は私の心の中にある。私の心の中に仏がいる。」と思わせてしまうのです。

家の骨組みと同じ

今見てきたご和讃のもう一首前のご和讃を開いて見ましよう。

如来すなはち涅槃ねはんなり

涅槃を仏性となづけたり

凡地にしてはさとられず

安養あんようにいたりて証すべし

前半は

如来∥涅槃∥仏性

とあり、この仏性は先に述べた一番目の仏性に当たります。そこで、このご和讃の後半を見ると、「凡地にては……」とあるように、「凡夫の位（身）で

信心ヨロソフソフトヲ

如来トヒレトキモノヲ

大信心ハ佛性ナリ

佛性子今如来ナリ

衆生有礙サトリテ

无碍ノ佛智ヲ多ク

會深難類下置地獄チ

多劫衆苦ニヒスリ

平等心ヲウルトキヲ

一子地トナラケタリ

一子地ハ佛性ナリ

安養イオナケルハ

如来ヲ入チ涅槃ナリ

涅槃ヲ佛性トシ多ク

凡地ニシテハサトラス

安養イオナケルハ

は覚れない。安養に至って覚ることになつてゐる。」とあります。

安養とは安養界、つまり極楽世界・浄土のことです。このように、私たちが真の、正味の仏性を現すのはお浄土に行つてからであると明記されているのです。

また、蓮如上人の『お文』にも浄土真宗が二益の教えであることが単純明快に示されています。

問うていはく、正定と滅度とは一益とこころうべきか、また二益とこころうべきや。

答へていはく、一念発起のかたは正

定聚なり。これは穢土えどの益なり。つぎに滅度は浄土にて得べき益にてあるなりとこころうべきなり。されば二益なりとおもふべきものなり。

正定…浄土往生が決定すること。正定聚。

滅度…涅槃のこと。生死の苦を滅して覺りの世界に渡(度)ること。

一念発起…阿弥陀様の本願を信する心が初めておこること。

穢土…煩惱や罪悪だけがされた世界。この娑婆世界。「御文」一一四)

教え、教義というものはどこの教義でもそうだと思いますが、必ずいくつかの重要な要あり、そのどれか一つでも取り替えると全体としては全く意味がなくなり、教えとして成り立たないものになるはずです。

例えば、家を建てることを考えてみましょう。まず基礎があり、柱や梁はりという大切な骨組みがあり、屋根や壁、床等々があつて、初めてでき上がります。そこで、もし柱の一本が短かったとすると、その家は建たないか、無理

をして建てたとしても常に倒壊の危険にさらされることになりす。

ですから、教えの一部分を勝手に取り替えることはとても許されることではありません。「浄土真宗」という名前、または親鸞聖人の教えということを離れてこのような異説を唱えるというのであればそれは全く自由ですが、浄土真宗や親鸞聖人の教えと称しながらこのような異説を唱えるならば、それによって惑わされる人たちが必ず出るわけですから、その罪は計り知れないものと言わなければなりません。

「地獄や極樂のことを軽視したり無視したりする人が現れることがある」ということから今日のお話が始まりましたが、浄土真宗において浄土の位置を勝手にこの世や自分の心の中に移動させるならば、それはもはや浄土真宗ではありません。

今日お話ししてきた「二益法門」のように間違つた信仰のことを「異安^{いあん}心^{じん}」と言い、これを教義として主張することを「異義^{いぎ}」と言います。

筆者註…異義と異安心には多くの種類があり、また機会を見てお話ししたいと思います。「間違った事柄の話は聞きたくない。聞く必要がない。」と仰る方も時々ありますが、正しい事柄をはっきりさせるためにも、「ここから先は間違い」という進入禁止の標識も必要です。本誌も二十三部を数え、読者の皆様も浄土真宗の本筋をつかんできてくださっていると思うので、そろそろ進入禁止の標識の話も必要になってきているのではないかと思います。

感想
意見

大阪市西淀川区 満田 英雄さん

各都ごとにありがたく拝読致しております。判った様で解けていないもので、念仏の尊さを不思議に思う中、妻の死に遇いました。阿弥陀様の本願の「必ず極樂に迎えて頂く」とのお言葉のありがたさを少しではありますが理解できる様になりました。自分ができることと言えただ念仏南無阿弥陀仏にすがりつくことと、『みめぐみの』第一部から第二十二部まで脳裏に残るように拝読するくらい

ですが、不思議の世界を理解できませんように精進したいと思えます。これからもわかりやすく尊いおみのりを説いて下さい。

大阪市西淀川区 山脇 佳子さん

私は幼い時からお寺に御縁を頂き、育つてまいりました。嫁いで幾夜かの日、迷いの心を持ち、お浄土の道をあやまり、さまよいました。このたび仏様のお念仏をたまわり『みめぐみの』のお勉強の中、日々「読み返し」光明を頂き南無阿彌陀仏の今日で御座います。長男は知的障害者三十三才ですがまじめで働きもの、西淡路きぼうの家で毎日いっしょうけんめい働いて居ます。仏様を心から信じていてとってもやさしいです。功德の宝をさずかりました。母親として命の限り莊嚴せねばと思う毎日です。

合掌

富山県 河合 寛さん

毎号を有難く読ませてもらっています。第二十部の二十二頁に浄土真宗の念仏は私たちが信心をいただいたそのお礼の念仏なのだとありますが仏恩の中に生かされている私と自覚せしめられたら念仏を申さずにおれません。

先祖供養の考え方ですが、私が供養するのではなく仏となられた先祖から願いをかけられている私でありましたと頭が下がります。



あとがき

みめぐみの刊行委員会

秋の到来と共に上陸した台風により被害にあわれた方々、新潟方面を襲った震災で被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げます。

前号までの三回は他宗派の僧侶を前にされた講演録でしたが、今号は今年六月、井波での門信徒に向けての御親教です。真宗・親鸞聖人の教えを、楽しい中に厳しさを交えながらお説き下さいました。

「二益法門」をテーマにその内容を詳しく解説されると同時に、重要な教義を取り違える怖さをお説き下さいました。自己流になりがちな信心をここにもう一度見直す機会を頂いたものと受け止めて参りたいと存じます。

今号には本願寺寺務所移転建設実行委員会からのご依頼で『嵯峨野の新天地へ』というご案内を挿ませて頂きました。ご一読をお願い致します。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。

『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第23部

2004年11月5日 印刷

2004年11月10日 発行

定価 200円

著者 大谷光道

発行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075 (351) 3555 FAX. 075 (351) 3120

振替口座 01060-5-56990

印刷 (株)中外日報社



